大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 雪云 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002960

人間社会学研究集録 6 (2010), 145-164 (2011年2月刊行)

梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念

林 雪云*

はじめに

北宋の詩人梅堯臣（一〇〇二年～一〇六〇年）、字は聖俞、安徽宣城の人。詩名と才華は若年の頃から高く、同時代の人々は彼を称賛したが、科挙試験においては、連続して落第し、進士の称号を得ることはできなかった。彼は仕方なく恩蔭の制を使って任官し、不本意ながら主簿や県令などの地方官を歴任した。一生の間困窮失意の生活を送り、鬱鬱として青雲の志を実現できなかった[1]。逆境にあった梅堯臣は無限の悲憤、苦悶そして期待などの複雑な心情を抱き、「平淡」な風格で知られる、人々の真情に訴える多量の詩歌を作った。詩歌・散文・賦など合計二千九百あまりの作品を残している。特に彼の詩は、詩壇において最高の評価を受け、劉克荘は『後村詩話』の中で、彼を宋詩の「開山祖師」[2]と称した。五歳年下で、終生その親友であった欧陽修も彼を「詩老」と称し、「自(みずか)ら以て及ばずと為す」[3]と言ったとされる。南宋の陸游は「梅聖俞別集序」で、欧陽修の文、蔡襄の書、梅堯臣の詩を「三者鼎立して、各おの自(おのずか)ら名家たり」[4]と評価している。

古来、梅堯臣に対する評価は、殆んど詩歌の審美観に集中している。しかし、梅堯臣の詩全体を通して見る時、これまであまり重視を受けてはいないが、非常に感動的な分野に目を向けざるをえない。それは、彼の詠妻詩である。

梅堯臣の詠妻詩は二つの部分から成る。前妻に対する悼亡詩と後妻に対する感慨を記した詩である。彼の詠妻詩は多くは日常生活に取材し、平凡な表現の中にその真情を見ることができる。梅堯臣の詠妻詩は、夫婦生活の価値を再発見し、夫婦生活を追憶する過程で書かれたと言えるであろう。さらに貴重なのは、愛情を描く場合であれ、結婚観を表明する場合であれ、妻という女性に対する態度を描く場合であれ、梅堯臣の詠妻詩が詩人の独特なものの見方を体現している点である。彼はユ

---

* 大阪府立大学人間社会学研究科博士後期課程（人間科学専攻）

1 梅堯臣略年譜（附録を参照）

2 劉克荘『後村詩話（中華書局　一九八三年刊）』前集巻二所収。

3 『宋史』（中華書局一九七七年刊　以下同じ）巻四百四十三、列伝第二百二、文苑五「梅堯臣傳」。

4 『渭南文集』巻十五（四部備要集部）（中華書局據汲古閣本校刊）所収。

ニークな視角から、直接的あるいは間接的に妻のイメージを描出しており、その作品からは妻に対する情感や態度、妻の実存、状況及び価値を見て取ることができる。つまり梅堯臣の詠妻詩にはその女性思想が素直に表現されているのである。同時に、梅堯臣の詠妻詩を通して、北宋の士大夫層に普遍的に存在した心理を観察することができる。梅堯臣の詠妻詩を正確に評価検討することにより、その人と為りやその詩を理解するのに資するだけでなく、当時生活化、家庭化の過程にあった宋代文化を白日のもとにさらすことができると考える。

第一節　宋代士大夫の女性観

梅堯臣の妻に対する観念を検討する前に、まず宋代士大夫の女性観を見て行こう。女性観とは、一般に女性の社会的地位や存在価値に対する基本的な評価を指す。「人類社会が発展する過程で、人間は、政治社会の異なった角度から女性に着目研究し、様々な観念、主張、思想を形成してきた。つまり、人間は、男性であれ女性であれ、女性に対して個別的な、あるいは系統だった認識を持つことができるのであり、我々はそれを女性観と呼ぶのである」[5]とあるように、誰もが自らの女性観を持つことができるのである。

中国の伝統社会の中で、女性は軽視され排斥された社会グループであり、男性の付属物となってきた。故に主導的な地位にあったのは、男性を中心とし、儒家思想を基礎とし、男尊女卑を核心とした女性観であった。このような女性観の下、女性の社会的地位はかなり低かった。しかし宋代士大夫の女性観は多元的であり、さらに言えば北宋と南宋後期ではかなりの差があった。

中唐以降の長期にわたる分裂混乱状態の後、ようやく成立したのが趙匡胤の宋王朝であった。社会が動揺する中、「三綱五常の道は絶え」[6]、「君君臣臣父父子子の道は乖る」[7]といった倫理綱紀が異常をきたした局面が、程度の差こそあれ、北宋建国後かなり長い時期にわたって存在し続けた。このような状況下、女性に対する要求も、宋代後期に比してかなりゆるかった。中唐以来形成されてきた社会の風俗習慣

5　魏国英『女性学概論』（北京大学出版社　二〇〇〇年刊）一一五九頁。
6『新五代史・晋家人傳』（北京中中華書局　二〇〇四年刊）。
7　『新五代史・唐廃帝家人傳』（北京中中華書局　二〇〇四年刊）。

は、宋代に入ってからも、天下太平の時代環境の中、継続していった。しかし、宋儒の唐代の風俗に対する評価は高くない。「唐の天下を有つや、治平なりと號すと雖も、然れども三綱は正しからず、君臣父子夫婦無く、その原は太宗に始まる。故に其の後世の子弟は使う可からず」[8]北宋建国の際には、「人は便ち禮義を崇び、經術を尊び、二帝三代に復せんと欲し、已自ら唐に勝る。」[9]宋儒は伝統的な倫理道徳を回復させることを自らの責務と考えていた。理学家たちは、女性は貞節を守り、男性は欲望を減少させねばならない、という貞節観を提議し、夫婦の関係においては、「男女には尊卑の序有り、夫婦には唱隨の禮有り」[10]と、妻が夫に絶対服従すべきであることを説いた。理学家の理論の影響下、女性は夫の付属品となっていった。倫理道徳が再建されていく中、社会の女性に対する評価は、かなり保守的な地点にまで後退した。「儒学復興の指導者は、経典の中の理想的な社会秩序と、迅速に変化する同時代の政治社会の秩序をなんとかすり合わせようとする道を探っていた。…彼らは古代の礼儀を復活させようと努力し、…士大夫たちのために、家庭の構成員が履行する義務を負う礼儀の規定を制定した。個人の修養こそ思想家のたちの最大の関心事となったのだ。」[11]そこで新儒学の学者たちは、封建的礼教に新しい内容を付け加え、中国の礼教は新たなる黄金時代に入ったのである。「女性は貞節を重んじなければならないとする観念は、程氏兄弟や朱熹の提唱を経て強化され、宋代以降の女性の生活は、宋代以前とは大いに変化した。宋代はまさに女性生活の転換期だったのである。」[12]言いかえると、宋代においては女性に要求されるのは寛大から厳格へと変化し、それに応じて、宋代の前後期の女性観も自ずと異なっている。

梅堯臣は北宋前期に生涯を送ったが、この時期には理学はまだ確立されておらず、彼の独特な履歴と生活体験から、梅堯臣は妻に対しかなりゆるやかな態度で接するようになった。また妻を社会的地位の低い存在として扱うことはなかった。とは言うものの、梅堯臣は封建的な男権社会に生きた人であり、封建的な教育を受けた。さらに宋代理学家の二程とは同時代人であったため、その影響をある程度は免れる

8　朱熹『近思録』（臺灣商務印書館　一九六八年刊）巻八。
9　朱熹『朱子語類』（中華書局　一九八六年刊）巻一二九。
10『周易程氏傳·帰妹』二程集　（北京中中華書局　一九八一年刊）九七九頁。
11　伊佩霞『内閨・宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社　二〇〇四年刊）、三頁。
12　陳東原『中国婦女生活史』（上海書店　一九八四年刊）、一三九頁。

ことはできなかった。彼の思想においては、女性の独立は相対的なものであり、限界があったことは否めない。梅堯臣の妻に対する温和な態度はまさにこの時代特有の産物であったと言えるだろう。

第二節　梅堯臣の妻に対する観念

北宋の女性の社会的地位は男性と対等というわけにはいかなかったが、南宋以後の元明清各代よりも高かったと言えるだろう。「夫は天なり、妻は地なり」、女性は「一に従いて終わる」[13]といった儒学の倫理概念は存在したが、女性に対する同情、理解、称賛の方がはるかに多かった。中唐までの文学作品には、夫や妻が自らの婚姻生活を記述したものは少なく、「妻のイメージがあらわれるのは稀で、たとえ出てきたとしても味気なく、単調であった。」[14]しかし宋代に入ると、「妻を語り妻に語りかける作品がこのように多く作られていることを考えれば、宋人は男女間の愛情の表現を一層発展させたのだといえる」[15]のであり、梅堯臣は自分の妻に対する情感を大胆にも筆端に載せることができた詩人であった。梅堯臣の詠妻詩は、ほとんどが日常生活に取材したもので、過去の日常生活や夢の中の一シーンを叙述するものもあれば、妻の声や容貌や日常生活で使っていた器物を描写するものもあり、最後は悲しみを表現して終わる。妻謝氏が亡くなってから数年の間に、純粋な悼亡詩とは言えないが亡き妻に言及する詩を含めると、４０首を越える詩を作っている[16]。ここにいくつ例を挙げておこう。

慶暦４年（１０４４年）に妻が突然なくなり、志を得ずに鬱々としていた彼を悲哀におとしいれ、詩「悼亡三首」[17]が作られた。

13　司馬光「訓子孫文」（『影印文淵閣四庫全書』第七〇三巻所収台湾商務印書館一九八三～一九八六年刊　以下同じ）。

14　王曉麗、劉靖淵『解語花』（河北人民出版社二〇〇一年刊）、一四六頁。

15　中原健二「夫と妻のあいだ―宋代文人の場合―」、（『中華文人の生活』一九九四年平凡社刊）。

16　梅堯臣の悼亡詩についての専論としては、森山秀二「梅堯臣の悼亡詩」（『漢学研究』第二六号、一九八八）がある。また、拙稿『関于梅堯臣的悼亡詩』（『中国言語文化研究』第八号、二〇〇八年）も参照されたい。

17　以下、梅堯臣の詩の引用はすべて朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社二〇〇六年刊）による。

結髪為夫婦　結髪して夫婦と為って
於今十七年　今に於て　十七年
相看猶不足　相い看るも　猶お足らず
何況是長捐　何ぞ況んや　是れ長えに捐つるをや
（其一）

慶暦６年（１０４８年）に書いた詩「悲書」に、

悲愁快於刀　悲愁は刀よりも快（するど）し
内割肝腸痛　内に肝腸を割きて痛ましむ
有在皆舊物　在る有るは皆舊物にして
唯爾與此共　唯だ爾のみ此れと共にす
衣裳昔所制　衣裳は昔製る所にして
篋笥忍更弄　篋笥　更に弄ぶに忍びんや
朝夕拜空位　朝夕　空位を拜し
繪寫恨少動　繪寫（しょうぞうが）は動きを少（か）くを恨む
雖死情難遷　死すと雖も　情は遷り難く
合姓義已重　合姓は　義已（はなは）だ重し

とうたい。又、至和二年（１０５５年）の「五月十七日四鼓夢與孺人在宮庭謝恩至尊令小黄門宣谕曰今日社與卿喜此佳辰便可作詩進來枕上口占」詩に、

…
陰會皆如實　陰に會するは皆實なるが如く
陽開不復存　陽開かば復た存せず
空余破窗月　空しく餘す窗を破る月
流影到床垠　流影　床垠に到る

とうたうのであり、詩人は真摯な態度で様々な角度から愛妻が自らの心に重要な位置を占めていることを述べているのである。前野直彬は言う、「梅堯臣は日常生活の詩人といえよう。科挙によらずに任官したため、詩人としての令名ははなはだ高かったが、晩年まで低い地方官の位置に甘んじなければならなった。うだつの上がらなかった生涯のなかで、彼は日常生活のさまざまなディテールを細かな観察の眼を働かせてうたいつづけた。とくに家族に対する関心はつよく、中年で最初の妻を失ってからは、亡妻への追憶と残された子供達への思いを執拗なまでに訴える」[18]、「六

18　前野直彬『中国文学史』（東京大学出版会一九七五年刊）、一三四頁。

朝から唐までのこの種の作品は妻の死からほぼ一年ほどの間に書かれ，それきりで終わるのが普通である。これに対して宋人はときに二年三年、長い場合は十年以上を経てまた書くのである。…すでに死後何年も経ているのに亡き妻への思いを作品化するということは、かれらの亡妻への思いが真実性を持つことの保障になると思う」[19]。まさにその通り、梅堯臣の詠妻詩は、叙事であれ抒情であれ、肺腑から出た「真」の一字を見て取ることができるし、この「真」一字こそかれの妻に対する観念を屈折して言い表しているといえるだろう。

１．妻の婦徳に対する賛美

中国古代の女性は現実の生活の中で、行動の制限や束縛を受け、経済政治においては受動的な地位に置かれた。女性を家庭内の関係や家庭生活に固定化し、女性を家庭の関係を処理し、職分を履行する存在としてしかみない、というのが伝統的な女性観の特徴である。彼らの存在価値は家庭の責務を担い、己を空しくして夫に奉仕し、妻としての、母としての責任を果たすことに会った。このような伝統的な女性観は、一代また一代と彼らの（女性自身を含む）潜在意識のなかに蓄積されていき、疑いえない原則となった。梅堯臣は封建時代の文学者であるから、かれの視野に於ける理想の妻のイメージは、このような伝統的な女性観を継承している。この伝統を受け継いで、梅堯臣の詠妻詩における妻謝氏のイメージは母性の輝きを放っている。謝氏は名門謝涛の令嬢であるが、「貧賤の夫婦は百事哀し」と元稹の「悲懐を遣る」詩[20]に云うように、梅堯臣は生涯官吏として任地を転々とし、運命に翻弄された。この間の艱難辛苦は詩人が味わったばかりでなく、謝氏にとっても、「黔婁（ぴんぼうにん）に嫁して自り百事乖（もと）る」（元稹「悲懐を遣る」）のであった。彼女は詩人とともに、困った時には支えあうよき妻であったばかりでなく、その苦労を人に知らせず、子供に尽くす母親でもあった。詩人は彼女の死後にようやくその一切を思い知らされ、梅堯臣は悲しみにくれた。「懐悲」詩に云う、

自爾帰我家　爾の我が家に帰（とつ）ぎて自り

---

19 中原健二 「夫と妻のあいだ–宋代文人の場合—」、(『中華文人の生活』一九九四年平凡社刊所収)。

20 元稹『遣悲懐三首』全唐詩巻四百四。

未嘗厭貧寠　未だ嘗て貧寠を厭わず
夜縫毎至子　夜の縫いものは　毎に子のときに至り
朝飯輒過午　朝飯は　輒ち午を過ぐ
十日九食韲　十日に九たび韲を食し
壹日儻有脯　壹日儻(ある)いは 脯(ほしにく) 有り
東西十八年　東西すること十八年
相与同甘苦　相与に甘苦を同じうす
本期百歳恩　本と百歳の恩を期せしに
豈料壹夕去　豈に料わんや壹夕に去らんとは
尚念臨終時　尚お念う臨終の時
拊我不能語　我を拊でて語ること能わず
此身今雖存　此の身今存すると雖も
竟当共為土　竟には当に共に土と為らん

詩人は繊細な筆遣いで、苦楽をともにし、互いに尊重しあった夫婦生活の細部を追憶し、亡妻の気立て優しく、善美を尽くした高い情操を表現しえている。生前の妻が、このような理想的な性格を備えていたればこそ、梅堯臣は妻の死後に「竟には当に共に土と為らん」という真情を吐露しえたわけである。もう一つ例を挙げる。欧陽脩の「南陽縣君謝氏墓誌銘」[21]にはつぎのように云っている。

慶暦四年秋、予の友宛陵梅聖俞呉興自り来り、其の内(つま)を哭する詩を出して、悲しみて曰く、我が妻謝氏亡(う)せたりと。我に丐(こ)うに銘を以てし、而して葬らんとす。予未だ作るに暇(いとま)あらず。居ること一歳の中に、書七八たび至り、未だ嘗て謝氏の銘を以て言と為さずんばあらず。且つ曰く、…卒するの夕べ、斂むるに嫁せし時の衣を以てす。甚だしいかな、吾の貧しきこと知るべきなり。然れども謝氏は怡然としてこれに処し、其の家を治めては、常法有り。其の飲食器皿は豊侈に及ばざるも、必ず精にして以て旨く、其の衣は故新無く、浣濯縫紉して、必ず潔くして以て完し。至る所の官舎は庫陋なりと雖も、庭宇は灑掃せられて、必ず粛として以て厳なり。其の平居の語言容止、必ず怡びて以て和らぐ。

以上に書かれている状況から判断して、この墓誌銘の原稿は梅堯臣自身の手になると断言してよいと思う。彼の筆下に、寛容で慈しみ深く、勤倹に家事を切り盛りし、貧賤に甘んずる伝統的な女性のイメージが紙上にありありと蘇っている。

同様に、彼が後妻に対する感慨を述べた詩には、到る処に妻の人格を賛美した表現が見られる。「幸いに皆柔淑の姿、稟賦　誠に獲る所あり」(「新婚」)、「単舟　匹

21　李逸安点校『欧陽修全集』(中華書局　二〇〇一年刊)第二冊　巻三十六。

婦　更に婢無く、朝餐　毎に愧(は)ず　婦親(つまみず)から炊(かし)ぐを」（「途中寄上尚書晏相公二十韻」）「我は樵を以て給するを免ぜらるるも、貧居と年はともに均し。道上　謳歌せず、妻も亦た恚嗔せず」（「記歳」）「已に伯倫の婦(つま)の、一醉　猶お傍らに在るに勝れり」（「梅雨」）とあり、どの句も貧賤に甘んじ、勤勉で聡明な妻のイメージに満ち溢れている。これこそ、中国の伝統的な女性が共有する美点であり、平凡ながらも偉大なる徳性なのである。

これにとどまらず、更に独自なのは、彼は亡妻の容貌を心から賛美する勇気を持ち合わせていた点である。中国人は長期に渡って儒家文化の影響を受け、女性に対する評価も、道徳や人格といった角度から決められ、人物の外貌やスタイルなどの外見にかかわることはほとんどなかった。伝統的な男尊女卑の思想により、夫は妻の前で「君は美しい」とは言えなかったし、他人の前では「拙荊」とか「賤内」としか言えず、自分の妻の容貌を賛美するなど、タブーであった。ところが梅堯臣は大胆にも、「悼亡三首」で、単刀直入に「世間の婦を見盡くしたれども、美しく且つ賢きに如くは無し」と述べた。謝氏への呼びかけも、「連城宝」「白玉佳人」「明珠」などと、すべて賛美に溢れており、伝統的な悼亡詩の価値観からの逸脱であった。このような大胆な告白は内向きの宋代文人においてもまれな例と言えるであろう。

２．妻の学才への関心と高い評価

宋代の女性の教養は一般的に言ってその前の朝代の女性より高いと言える。宋代の女性は家庭の条件が許せば、教育を受ける権利を享受できた。司馬光の『書儀』[22]居家雑儀には、「女子は六歳にして始めて女工の小なる者を習い、七歳にして始めて孝経論語を誦し、九歳にしてこれが為に論語孝経及び列女伝及び女誡の類を講解し、略ぼ大義を暁(さと)らしむ。古今の賢女は、歴史を観て自ら鑒(かがみ)とせざる無し」とあるが、「女子に才無きは便ち徳なり」という観念がまだ出現していなかったため、女性はある程度教育を受ける権利を享有していた。であればこそ、「近世の婦女　詩を能くするもの多し、往往にして古人に臻(いた)る有り」と北宋魏泰が『臨漢隠居詩話』[23]で評しているのである。

22　司馬光『書儀』巻四・居家雑儀。

23　魏泰『臨漢隠居詩話』（『影印文淵閣四庫全書』第一四七八冊所収）。

北宋前期のゆるやかな社会環境によって、輝かしい女性文化が出現した。このような環境下、女性はそれほど束縛を受けない個性を形成し、才智に富んだ一群の女性たちが育まれた。梅堯臣の前妻謝氏は彼が言うように、「我が妻は太子賓客謝涛の女、希深の妹なり。希深父子は当時の聞人にして、世よ顕栄す」（欧陽修「南陽県君謝氏墓誌銘」）であり、後妻の刁氏は「昇州（現在の江蘇省南京市）の人で、官は刑部郎中、西昆派詩人の刁衍の孫で、太常博士刁渭の娘」（朱東潤『梅堯臣伝』）であった。二人の夫人はどちらも名門の出であったから、読書と教育を受ける権利を享受することができた。梅堯臣は、「盛族に生まれた」妻の才智に非常に高い評価を与えている。

吾妻常有言　吾が妻　常に言う有り
艱勤壯時業　艱難は壯時の業
安慕終日間　安んぞ慕わん終日間にして
笑媚看婦靨　笑媚して婦の靨を看るを
自是甘努力　是自り甘んじて努力し
於今無所懾　今に於いては懾（おそ）るる所無し
（「初冬夜坐　憶桐城山行」・一〇四五年）

是歳南方旱（ひでり）あり、飛蝗を仰ぎ見て歎じて曰く、今西兵未だ解けず、天下重く苦しみ、盗賊暴かに江淮に起る。而も天旱あり且つ蝗あること此くの如し。我は婦人爲り、死して君の我を葬るを得ば、幸いなりと。其の能く安んじて貧しきに居りて困しまざる所以の者は、其の性識の明らかにして道理を知ること此の類多ければなり。(歐陽修全集「南陽縣君謝氏墓志銘」)

梅堯臣にとって、妻は美しい異性であるだけでなく、独立した思想や精神をもった人間であった。現実の生活の中では彼女の社会的地位は高くはなかったが、平凡な日常生活の中で、彼女は見識を示している。梅堯臣はこのように妻の才知を認め、妻を理解し、妻の美点を高く評価していたのである。さらに次のくだりを見てみよう。

吾嘗て士大夫と語りしとき、謝氏は多く戸屏従（よ）り竊かにこれを聴き、間（ひま）あらば則ち尽（ことごと）く其の人の才能賢否及び時事の得失を商搉し、皆条理有り。吾呉興に官し、或いは外自り醉いて歸るに、必ずや問いて曰く、今日孰と與に飲みて楽しむやと。其の賢なる者を聞くや、則ち悦び、否（しから）ざれば則ち歎じて曰く、君の交わる所、皆一時の賢雋なり、豈に己を屈してこれに下るや。惟だ道徳を以てするのみ、故に合う者尤も寡し。今是の人と飲みて歡ぶや？（欧陽修「南陽県君謝氏墓誌銘」）

中国伝統的儀礼において、女性は政治に参与せず、家庭外の事に関与しない、これは男女の共通認識であった。伝統的な「男女授受不親」[24]といった礼教の規定は、女性の活動範囲を狭め、女性を豊饒なる外部世界から隔絶させた。女性の言語や議論は家庭内に限られ、女性と会話を交わす男性は、家族の構成員に限られた。このような生活空間の制限は、女性の精神空間を狭めた。宋代もその例外ではない。理学者の朱熹はこれを「内正しければ則ち外正しからざる無し」[25]と表現した。北宋の司馬光の『書儀』居家雑儀[26]にも次のような一段がある。

> 男は外事を治め、女は内事を治む。男子は昼は故無くして私室に処らず、婦人は故無くして中門を窺わず。故有りて中門を出でなば、必ず其の面を擁蔽すべし（蓋頭、面帽の類の如し）。

ここでは「中門」が内外を分ける境界線になっている。女性は「中門」という境界線を越えることはできなかった。伊佩霞は司馬光の『書儀』居家雑儀について「朱熹は『小学』の中で『礼記』の「男は内を言わず、女は外を言わず」を引用している。一般的に言って、男性がこれまで家庭内の事に口出ししたことがないわけではないなら、妻のやる事に介入するなと言われたことがほとんどないのだと言えようし、逆に彼らの注意力がまともな方向に向けられているとするなら、警戒して女性に男性の領域に入らないように縛りをかけているのだろう」[27]とコメントしている。しかし、梅堯臣は、逆に自分の妻を警戒することなく、堂々と謝氏を称賛し、彼女のこの習慣を後の人々に残した墓誌銘に書き入れた。

屏風の後ろに立つ謝氏は名家の閨秀であり、きちんとした文化教育を受け、伝統的な儀礼について熟知していた。ところが、彼女はかなり風変りで、おとなしくはしておらず、「男は外に主たり、女は内に主たり」という礼節を守らぬばかりでなく、屏風の外でかわされる夫と客の会話を盗み聞きし、会話の内容に批評を加えてさえいるのである。彼女はなぜこのような自由を享受できたのだろうか？開明的な夫が彼女の行動を黙認し、理解し、褒め称えたからである。家庭の中で、彼女には発言権があり、夫婦の間で意思の疎通が活発におこなわれていたと言えるだろう。外部

---

24 『孟子』巻 7 離婁篇。引用は四部備要本による。
25 朱熹『原本周易本義』（『影印文淵閣四庫全書』第十二冊所収）巻二。
26 司馬光『書儀』（『影印文淵閣四庫全書』第一四二冊所収）巻四・居家雑儀。
27 伊佩霞『内閨・宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社　二〇〇四年刊）、二一頁。

の事情と自分の夫の間には密接な関係があったので、妻は外部の事情にも重大な関心を払った。というわけで、妻は屏風の外の会話を堂々と「盗み聞き」し、夫も「盗み聞き」を不快には思わなかったのである。梅堯臣が妻のこのようなエピソードを書き入れたのは、まさに彼の他人とは異なる妻に対する観念を反映している。

もちろん屏風のうしろに隠れて夫とその友人の会話を盗み聞きした最初の妻が謝氏であったと言うつもりはない。南朝宋代の劉義慶の志人小説『世説新語』[28]において、早くも同じような画面が出ている。

> 與嵇阮一面、契若金蘭。山妻韓氏覺公與二人異於常交、問公、公曰、「我當年可以爲友者、唯此二生耳。」妻曰、「負羈之妻亦親觀狐趙、意欲窺之、可乎?」他日二人來、妻勸公止之宿、具酒肉、夜穿墉以視之、達旦忘反。公入曰、「二人何如?」妻曰、「君才致殊不如、正當以識度相友耳。」公曰、「伊輩亦常以我度爲勝。」

> 山公（濤）は嵇（康）阮（籍）と一面し、契は金蘭の若し。山妻韓氏は公と二人と常の交わりに異なるを覺り、公に問う。公曰く、「我當年以て友と爲すべき者は、唯此の二生のみ」と。妻曰く、「負羈の妻も亦た親しく狐（偃）趙（衰）を觀る、意これを窺わんと欲す、可なるか？」他日二人來たり、妻公に勸めてこれを止めて宿せしむ。酒肉を具え、夜墉を穿ちて以てこれを視、旦に達して反るを忘る。公入りて曰く、「二人は何如？」と。妻曰く、「君の才は致殊（こと）に如らず、正に當に識度を以て相い友たるべきのみ」と。公曰く、伊輩も亦た常に我が度を以て勝れりと爲す」と。

梅堯臣の妻の習慣は山濤の妻韓氏とよく似ている。ただ、『世説新語』は南朝貴族の逸話を集めたものであり、梅堯臣の妻のことは、彼自身が書いたので、現実的な意義が全く違うと言えるだろう。管見によれば、彼は山濤の妻の逸話を知っていて、それを意識して書いたと考えてよいだろう。先例があるためいささか礼の規定から逸脱した妻のエピソードを書きこんでも非難を受けることはあるまいと確信してのことであろう。とはいえ、我々は梅堯臣の胆識に敬服せざるをえない。

当時の士大夫が書いた女性の墓誌銘の例として、曾鞏の作品「江都縣主簿王君婦人曾氏墓誌銘」を見てみよう[29]

> 孝行聰明にして、能く書を讀み、古今を言う。婦人法度の事を知り、針縷刀尺に巧みにして、手を經るものは皆絶倫たり。…曾氏冢婦と爲りて、其の姑蚤世し、獨り

28　余嘉錫『世説新語箋釋』下巻（上海古籍出版社一九九三年刊）第六七九頁。

29　『曾鞏集』（中華書局出版　一九八四年刊）巻第四十六　六二六頁。なお曾鞏が書いた女性の墓誌銘については、他の機会に論ずる予定である。

家政を任さる。能く精力し、躬ら勞苦し、細微を理め、先後緩急に隨いて樽節(せつやく)を爲し、各の條序有り。事時節に有らば、朝夕共に賓祭奉養し、其の門内を撫し、皆時(つかさ)どる所を失わず、將に恭嚴誠順を以て、能く其の屬人を得んとす。…其の夫歎じて曰く、「我能く意を一にして自ら官學に肆にし、私を以て其の志を累わさざるは、曾氏我を助くるなり」と。

曾鞏はまず妹が聡明で読書好きであり、古今の歴史によく言及したことを述べた上で、女性の守るべき規範を心得、針仕事がとても巧みで、上手に家計を切り盛りしたこと等を称賛している。曾鞏が理想とした妻とは、才華に富み、見識を持って夫を助けながら、夫によく従い、婦道を尽くす女性であった。梅堯臣の妻に対する観念も、まさにこのような大前提を共有しつつ、同時に夫婦の間の平等で互いに支えあう関係に重点を置いていた。梅堯臣の妻に対する観念は、伝統を継承している面と、革新的な面の両面があったと言えよう。以下の詩に見える夫婦関係からもその一斑を見ることができよう。

３．互いに尊重しあった夫婦関係

梅堯臣は妻のこのような行為を認め、ほめたたえ、顕彰したが、このことからも、彼が単一の思考の枠の中で生きていたのではない。苦境に陥っていた時には、彼ら夫婦は心を合わせ、生活上の圧力に立ち向かった。「吾をして富貴貧賤を以て其の心を累わせざらしむるは、抑も妻の助けなり」と「南陽縣君謝氏墓誌銘」にはあるが、ここでは妻は自分の苦しみを理解してくれで、自分と肩を並べて生きている。彼は妻を回想する時に、「見ずや　沙上の双飛の鳥、取る莫れ　波中の比目魚」(「八月二十二日回過三溝)、「同に未央殿に謁し、共に明主の恩に霑う」(「五月十七日四鼓夢与孺人在宮廷謝恩至尊令小黄門宣諭曰今日社与卿喜此佳辰便可作詩進来枕占」)、「頭を仰ぎ月を看て新鴻を見る、形影　双飛す玉鑑の中」(次韻答王景彝聞余月下与内飲」) と詠っているが、ここにはある種の平等な夫婦関係が暗示されている。

この他、梅堯臣の個性的な生活様式である友人的夫婦の描写もあった。古代社会では女性の飲酒は禁止はされていなかったが、梅堯臣以外の詠妻詩の中では夫が妻と一緒に酒を飲む場面は少なかった。梅堯臣と妻の日常生活の中では、夫婦は普段から杯を手にし、向かい合って酒を飲んでいる場面がよく出てくる。ここにいくつ例を挙げておこう。慶暦二年 (1042 年)、彼らは旅の途上にあり、船中で新年を迎えた。梅堯臣は、互いに向かい合って坐り、新年を祝った。「歳日旅泊家人相與爲壽」

詩に書いている、

…
孺人相慶拜　孺人　相慶拜し
共坐列杯盤　共に坐して杯盤を列ぬ
盤中多橘柚　盤中　橘柚多く
未咀齒已酸　未だ咀まずして齒已に酸(し)む
飲酒復先醉　酒を飲みて復た先ず醉い
頗覺量不寛　頗る覺ゆ　量は寛からざるを
…

慶暦六年（1046 年）に作った「元日」詩には次のように言う。

…
是時値新歳　是の時新歳に値い
慶拜乃唯内　慶拜は乃ち唯だ内のみ
草率具盤餐　草率に盤餐を具え
約略施粉黛　約略に粉黛を施す
舉杯更獻酬　杯を舉げて更(こもご)も獻酬し
各爾祝鮐背　各爾(おのお)の鮐背(ちょうじゅ)を祝る
…

この詩は慶暦六年（1044 年）の元日に慶暦二年の元旦の情景を思い出して詠んだ詩である。当時彼ら夫婦は風雪に遭い、呉埭に舟を停泊させていた。元旦をともに祝ったのは、妻一人だけであった。妻は有り合わせの材料で食事を作り、そそくさと化粧をする。その後で夫婦は杯を挙げて互いの長寿を祈ったのであった。この二首では梅堯臣は前妻の謝氏と杯をともにしているのであるが、同様に後妻の刁氏と杯をともにしている例もある。「舟中夜与家人飲」を見よう。

月出斷岸口　月は出(い)ず　斷岸の口
影照別舸背　影は照らす　別舸の背
且獨與婦飲　且く獨り婦と飲むは
頗勝俗客對　頗る俗客に對するに勝る
月漸上我席　月は漸く我が席に上がり
暝色亦稍退　暝色　亦た稍や退く
豈必在秉燭　豈に必ずしも燭を秉つに在らんや
此景已可愛　此の景　已に愛すべし

これは慶暦六年(1046 年)、再婚後しばらくしたころ、梅堯臣が後妻の刁氏とともに、徐州の任地に行く途中、安徽の潁州に晏殊を訪ね、出発直前に作った詩である。詩の中で梅堯臣は、「且く獨り婦と飲むは、頗る俗客に對するに勝る」と述べている。つまり彼にとって、妻は友人同様に楽しく語り合い、楽しく酒を飲む仲間であ

った。「和道損欲雪與家人小児輩飲」詩には次のように書いている。

陰雲濃壓野　陰雲　濃くして野を壓す
風獵樹高鳴　風獵(ふる)いて樹は高く鳴る
寒禽並枝立　寒禽　枝に並びて立ち
頗以見物情　頗る以て物情を見る
目前兩稚子　目前の兩稚子
爲慰豈異卿　慰めと爲ること豈に卿と異ならんや
欲置一壺酒　一壺の酒を置き
且獨對婦傾　且く獨り婦に對いて傾けん

この詩は慶暦六年（1046 年）に、王道損の「欲雪與家人小児輩飲」に和した詩である。蕭条たる天気の日に詩人は物思いにける。暗く沈みがちな詩人は、妻と杯を傾けて心を和ませる。次に「次韻答王景彝聞余月下與内飲」詩を挙げる。

仰頭看月見新鴻　頭を仰ぎ月を看て新鴻を見る
形影雙飛玉監中　形影　雙飛す玉鑑の中
呼我作卿方舉酒　我を呼び卿と作して方めて酒を舉げ
更煩佳句賞高風　更に佳句を煩わして高風を賞さん

この詩は嘉祐四年（1059 年）に作られた。当時梅堯臣は五十八歳で、王景彝の「聞梅聖俞月下與内飲」詩に次韻したものである。詩人が空を見上げて月を眺めていると、北からつがいの雁が月に向かって飛んで来る。目の前に坐る妻は私に卿(あなた)と呼び掛けてから杯を挙げ、佳句を作って高雅な心境を歌ってくれる、ここに詩人の弾んだ真情が表現されている。この他、梅堯臣は古代の夫婦や友人の間で用いられて親愛の情を表した「卿」という呼称を用いており、互いに敬愛し合っていた夫婦関係の一端が垣間見られる。これらの詠妻詩に現れた日常生活の描写を通じて、梅堯臣が追い求めた穏かで打ち解けた夫婦関係を見て取れる。また彼にとって、妻は良妻賢母であるだけでなく、ともに杯を挙げ、胸襟を開いて語り合える親密な知己であった。ここに彼の女性に対する理想と期待が体現されている。

家庭生活の月並みなディテールが、謝氏の死とともに潮が引くように失われていく時、逆に表に出てきたのは、謝氏の母性的な美徳だけでなく、審美学的な女性のイメージであった。彼の筆下では、妻は夫あるいは他の男性よりも聡明であり、より高い実務能力を持っていた。梅堯臣の女性に対する平等な態度がここにはっきりと表れていると思う。

以上の分析により、梅堯臣の妻に対する観念がいささか明らかになったと考える。

梅堯臣は士大夫ではあったが、社会地位がそれほど高くもない亡妻と後妻を何度も詩の題材に取り上げ賛美し、熱情をこめて自分と艱難辛苦をともにした彼女たちの高尚な品格を称えた。これは女性が徐々に差別を受け始めた北宋時代にあっては、かなり開明的進歩的行為であり、詩人の胆識が現われているだけでなく、彼の進歩的な女性観を見て取ることができる。

第三節　梅堯臣の妻に対する観念はいかに形成されたか

梅堯臣は妻の美しい容貌、高尚な人格を直截的に賛美し、妻の才智を評価し、女性の人格を尊重した。彼は官僚士大夫の一員としては、他の人々に比していささか進歩的な女性観を抱いており、このような精神はまことに尊ぶべきである。梅堯臣がこのような妻に対する観念を形成するにあたっては、客観的には社会や政治、そして文壇の影響を受けているが、主観的には彼自身の境遇や個性と切り離して論ずるわけにはいかない。そこでこの二つの点から妻に対する観念の形成過程を見ていきたいと思う。

（1）社会と政治の背景

北宋において、女性の多方面にわたる能力はよく知られていた。司馬光が書いた「武陽県君程氏墓誌銘」[30]に出てくる蘇洵の妻程氏の例を見てみよう。彼女は家産の経営に長けていた。「服玩を罄出してこれを鬻ぎて以て生を治め、数年ならずして遂に富家と爲り」、蘇洵は「是に由りて専ら学に志し、卒に大儒と為る」。司馬光は彼女を「能く開発輔導し、其の夫子を成就せしむ」、「国を有ち家を有つ者、其の興衰は閨門に於いてせざる無し」と賞賛している。さらに、北宋理学家の陳襄は「宋国太夫人符氏墓誌銘」の中で、「給事の至る所異政有りて、號して良吏と爲すは、抑も夫人の助けなり」[31]。彼女らが生産活動の領域で果たす役割は日々に拡大し、女性の社会的が変化する基礎的条件が備わった。

それから、北宋の女性は子弟の教育の面でも大きな貢献をし、さらに社会の評価

30　司馬光『温国文正司馬公文集』（四部叢刊本）巻七十六。

31　陳襄『古灵集』卷二十　見《四庫全書》第一〇九三 册　第六六七 頁。

と尊重を受けることになった。例えば、宋の蘇易簡の母薛氏は、子弟教育で定評があった。蘇易簡がただ一度の受験で状元及第を果たし、その後順調に参知政事に就任すると、太宗はその母を招き教育に成功した理由を尋ねた。「何を以て子を教え、此の令器を成すやと、薛氏答えて曰く、幼きときは則ち束ねるに礼譲を以てし、長じては教うるに詩書を以てす。太宗誇奨して曰く、真に孟母なりと。」[32]もう一つ例を挙げると、博学多才で知られた賈黄中の母王氏もまた宋の太宗から、「子を教うること此の如し、今の孟母なり」[33]と表彰されている。宋代には不幸に直面して離婚を申し出る女性も存在した。胡仔『苕溪漁隠叢話』[34]に記載されている例を見てみよう。

> 高斎詩話に云う、祖無択晩くに徐氏を娶る、姿色有り。議親の時、無択は館職為りて、徐氏は必ず其の人を訾相せんと欲す。而れども無択は貌寝く、当たるを得ざるを恐る。同舎の馮当世は豊姿秀美なり、乃ち媒妁を諭して馮の局を出て、鞭を揚げ馬に躍り、徐の居を経るを竢ちて、此れ祖学士なりと曰わしむ。徐竊かに窺いて甚だ喜ぶ。成婚して、始めて其の非なるを寤り、竟に以て反目して離婚す。

この話では祖無択の妻徐氏は、結婚後相手に騙されたと知って離婚している。『宋刑統』[35]巻十四「戸婚律・和娶人妻」は、「若し夫妻相い安諧せずして和離するものは、坐せず」、「彼此情相得ず、両りが離るるを願う者は、坐せず」と規定しており、女性が婚姻生活の中である程度の自主権を持ち、それが法律上保証されていたことがわかる。

家庭と社会においてある程度の地位を確立した北宋の女性は、社会生活の各方面で小さからぬ役割を果たすことができた。梅堯臣はこのような文化的背景のもとで育ち、彼の女性観もその影響を深く受けたのであった。

（２）個人の生活体験

梅堯臣の個人的な経験と性格はその生活感覚に特別な色彩を与え、彼は妻に対して独特な観念を持つに至った。官途における蹉跌、異民族の侵入、科挙試験におけ

---

32 『宋史』巻二百六十六　蘇易簡伝。
33 邵伯温『邵氏聞見録』（中華書局一九八三年刊点校本）巻六。
34 胡仔『苕溪漁隠叢話』（人民文学出版社一九八一年刊）。
35 『宋刑統』（上）（文海出版会　中華民国五十三年刊）。

る挫折、空しく抱いていた報国の念のために、梅堯臣は常に不満や鬱憤を覚え、内心の苦悶を晴らす術もなかった。そのため、不平不満を言わず、彼の左右に付き添っていた妻が彼の人生において重要な地位を占めるに至った。彼の一生は平坦ではなかったが、幸いにも彼にとって特別な意味を持つ女性に出会うことができた。それが前妻の謝氏と後妻の刁氏である。

梅堯臣が二十六歳の時、謝氏を娶った。名門出身の謝氏は、聡明で有能な女性で、しかも性格は正直、夫のために様々な提案を行った。前出の「南陽縣君謝氏墓誌銘」に「其の能く安んじて貧しきに居りて困しまざる所以の者は、其の性識の明らかにして道理を知ること此の類多ければなり」とある通りである。しかしこの賢妻は三十七歳で病没し、梅堯臣は無限の感傷を催し、彼女の死後五年もたたぬうちに、亡妻について四十首を超える詩を作り、彼女への思慕の念を託した。これらの悼亡詩はもの柔らかで含蓄に富み、読む人を深く感動させ、梅堯臣の亡妻に対する切実な思いが行間にほとばしっている[36]。まさに「梅堯臣は結婚前には謝氏について何も知らなかったが、結婚後の生活では、彼女に完全に満足していた。それ故、謝氏が三十七歳でなくなると、梅堯臣は不断に彼女を追憶したのである」、「謝氏に対する思いを梅堯臣は生涯忘れなかった」と朱東潤が言う通りである[37]。謝氏が亡くなると、その後妻となったのは前述した通り、昇州兵部郎中刁衍の孫、太常博士刁渭の娘であった。刁氏は謝氏と同様に、「幸いに皆柔淑にして、稟賦　誠に獲る所あり」（梅堯臣「新婚」詩）であり、彼女は二十五歳で貧しく尾羽うちからし、前途洋洋とは言いかねる梅堯臣と結婚したが、その時梅堯臣は四十五歳であった。それから梅堯臣が五十九歳でなくなるまで、彼女はずっと彼に付き添い、前妻が残した二人の子供と、自分の二人の子供を淡々と育てあげた。前妻に恋恋としていた夫は、「呼び慣れたれば猶お口に誤りあり、往（すぎしこと）に頗る心の積もるあるに似たり」（「新婚」）とあるように、自分の名前さえ忘れてしまうことすらあったが、賢明な彼女は恨み事も言わず、「道上　謳歌せざる」夫に対して「妻（刁氏）は亦た恚嗔無し」（「記夢」）であり、官海を漂う梅堯臣に一貫して寄り添った。伝統的な女性の美徳が輝く刁氏はひたすらきちんと家事を切りまわし、夫の世話をし、子供を養育し、梅堯臣に家

36　この點については拙稿『関于梅堯臣的悼亡詩』（『中国言語文化研究』第八号、佛教大学中国言語文化研究　二〇〇八年刊）で触れた。

37　朱東潤『梅堯臣伝』（中華書局　一九七九年刊）一五、八十八頁。

事の心配をさせなかった。「単舟　匹婦　更に婢無く、朝餐　毎に愧ず婦(つま)の親しく炊ぐを」と梅堯臣の「途中寄上尚書晏相公二十韻」詩にうたうように、名門出身の彼女は苦難を味わいつくしたが、ずっと素朴で誠実な性格を保持し、梅堯臣と官海における浮沈をともにし、「貧しくして怨まず、富みて驕らざる」生涯を送った。これは本当に尊敬に値する。

妻たちが聡明で有能、素朴で善良な性格であったため、梅堯臣は何の心配もなく自分の事業を始めることができたし、詩賦の創作に精を出すことができた。生活上では妻の世話を得られたし、感情の面では妻の励ましを得られた。精神的には妻の支持を得られたため、逆境にあっても自分の信念と情操を維持できたのであった。というわけで、梅堯臣の女性観の形成は、二人の女性の存在と密接な関係がある。彼女たちは梅堯臣に始終寄り添い、かいがいしく世話をし、梅堯臣は終生彼女たちから恩を受けた。梅堯臣の胸中では、彼女たちは崇高な地位を占めており、梅堯臣の一生に巨大な影響を与え、その結果梅堯臣は温かな態度で彼女らに接することとなった。

おわりに

長きにわたった中国の封建社会において、女性は独立した人格をもたず、夫の付属物にすぎなかった。夫婦がどんなに親密でも、妻は依然として夫に頼って生きていた。梅堯臣は一般の封建時代の文人とは異なり、詩の中で妻を人格を持つ女性として描いた。彼らは夫婦であるだけでなく、友人知己であった。妻に対する愛情以上に、妻の才智、人格に対する尊敬と敬慕の念が彼の詩に見て取れる。梅堯臣は妻たちの聡明さと才知を認め、その存在価値を認め、妻を大いに称賛し、肯定的な態度を取った。儒家思想が男性の意識を占拠していた宋代に、梅堯臣は妻を独立した意義を有する人間として詩に描写し、高い評価と尊厳を彼女らに賦与したが、これは彼の進歩的な女性観の表われであった。彼の詠妻詩は、女性に対する配慮と女性の価値に対する高い評価を具体的に表現したものであった。彼はその筆を借りて、女性を尊重し、仲間型夫婦関係を追求するという内心を人々に吐露したのであり、かの時代に在っては本当に貴重な存在であった。もちろん、梅堯臣は官僚士大夫の一員として、妻は良妻賢母でなければならず、家庭内の事務をこなすのがその基本的な職責であると考えていた。これは彼の保守的な一面であった。というのも彼は

一人の封建社会の文学者に過ぎず、彼が受けた教育も封建時代のオーソドックスな教育であったため、保守的な思想をもっていたのはやむを得ない。彼の妻に対する観念は、実際上は封建士大夫の進歩的な面と落伍した面が混淆したものであり、当時の士大夫の代表的な例であったと言えよう。

【附録】梅堯臣略年譜

咸平五年（一〇〇二）	一歳	宣城（安徽省）に生まれる
天聖五年（一〇二七）	二十六歳	謝氏（二十歳）と結婚
天聖八年（一〇三〇）	二十九歳	桐城県（安徽省）主簿
天聖九年（一〇三一）	三十歳	河南府（洛陽）主簿、欧陽脩と知り合う
天聖十年（一〇三二）	三十一歳	河陽県（河南省）主簿
明道二年（一〇三三）	三十二歳	徳興県（江西省）知事
景祐二年（一〇三五）	三十四歳	建徳県（安徽省）知事
宝元二年（一〇三九）	三十八歳	襄城県（河南省）知事
康定二年（一〇四一）	四十歳	湖州府（浙江省）税務官
慶暦四年（一〇四四）	四十三歳	税務官を終え、湖州から都の汴京（河南省開封市）へ向かう途中、七月七日、高郵（江蘇省）で妻謝氏が亡くなる。
慶暦五年（一〇四五）	四十四歳	忠武軍節度使（河南省許州属官
慶暦六年（一〇四六）	四十五歳	刁氏と再婚
慶暦七年（一〇四七）	四十六歳	許州での任を終え、汴京に帰る。
慶暦八年（一〇四八）	四十七歳	鎮安軍節度使（河南省陳州）
皇祐元年（一〇四九）	四十八歳	父の梅譲が亡くなり、故郷の宣城で喪に服す。
皇祐三年（一〇五一）	五十歳	喪が明ける。
皇祐五年（一〇五三）	五十二歳	母が亡くなり、故郷の宣城で喪に服す。
至和三年（一〇五六）	五十五歳	はじめて中央官僚（国子監直講）となる。
嘉祐五年（一〇六〇）	五十九歳	四月、疫病で亡くなる。

On the poems of Mei Yaochen (梅堯臣) concerning his wives' ordinary lives, and his view on his wives

Setuun Rin

Mei Yaochen (梅堯臣), a poet of the Song dynasty, is very famous for a series of poems in which he mourned over the death of one of his first wife (Daowangshi 悼亡詩); in a previous article ("On Mei Yaochen's Daowangshi 關於梅堯臣的悼亡詩"), I have described its characteristics in detail.

This article analyzes the poems in which Mei described his wives' ordinary lives, as well as the epitaph for his first wife composed by Ouyang Xiu (歐陽修), entire parts of which were contributed by Mei. There are two important clues to understanding the process through which the poet built his view on his wives: one is his consistent way of describing them, and another is his unique method of observing them. By examining and evaluating these poems will provide a better understanding of not only Mei Yaochen's personality and his works but also the culture of the Song dynasty, when the scholar-bureaucrats gave much importance to their domestic lives.